

キサキ遺跡 4 地点・5 地点

－はじまりのむら－

囑託調査研究員 米 倉 貴 之

遺跡の立地と周辺遺跡

キサキ遺跡は、成田市の北東部、旧大栄町である成田市一坪田字キサキに所在し、利根川に注ぐ大須賀川の西岸、標高41mの台地上に立地している。

本遺跡の周辺では、東関東自動車道建設等によって多くの遺跡の調査が行なわれてきた。これらの遺跡からは旧石器時代、縄文時代を中心とした遺構が多く検出され、中でも本遺跡と同一台地上に立地する新山台遺跡では、縄文時代中期後半を中心とした集落跡がみつまっている。

過去の調査成果

キサキ遺跡でも、過去の調査で縄文時代の遺構が検出されている。平成5年に行なわれた調査（1地点）では、前述した新山台遺跡とほぼ同時期とされる住居跡や土坑などが検出されている。また、平成14年・15年に行なわれた調査（2・3地点）においても、縄文時代を中心とした遺構が検出し、これにより本遺跡は縄文時代の集落跡として認識されてきた。

調査概要

今回発表の対象となるキサキ遺跡4地点は、（仮称）大栄野球場整備に伴って、平成20年6月～12月にかけて発掘調査を実施した。調査の結果、旧石器時代の石器集中地点2ヶ所、縄文時代の陥穴4基、古墳時代前期（3世紀中ごろ～4世紀）の竪穴住居跡23軒・土坑2基等が検出された。遺物は、古墳時代前期の土師器を中心に出土しており、器種別に見ると、ほぼ全ての住居跡から甕が出土し、次いで高坏・壺が多く出土している。他に器台・鉢・土玉といった様々な器種がみつまっている。

今回の発表では、その豊富な遺物の中から、特徴的な土器について触れたいと思う。

調査の成果

《6号住居跡出土の「超大型壺」》

6号住居跡は、調査区の東側に位置し、規模は南北約6.5m、東西約6.2mの方形を呈する。

遺物は、住居南東コーナーにつくられた貯蔵穴付近に集中し、中でも床面直上より出土した壺は、口縁部に押圧による文様が施され、大きく張ったきわめて特徴的な胴部をもつ。大きさは、口径24.6cm、底径12.2cm、高さ53.7cm、最大胴部径65.5cmを測り、今回出土した遺物の中でも最大の土器である。似た形の壺が八千代市権現後遺跡^{こんげんうしろ}などから出土しているものの、最大胴部径40cmとやや小さく、今回出土した例は「超大型壺」といえる。このような形態の壺は、弥生時代後期の東京湾岸地域に系譜をもつ伝統的な装飾壺にもみられるが、今回の例にはそのような装飾は認められないことから、伝統的な装飾壺が終わりを迎える古墳時代前期でも中頃の段階が想定される。

《8号住居跡出土の「大廓式壺」^{おおくろわ}》

8号住居跡は、規模が南北約6.8m、東西約6.4mの方形を呈する住居跡である。

出土した「大廓式壺」とは、静岡県沼津市大廓遺跡を標識遺跡とする、駿河地域の古墳時代前期土器様式の一つである「大廓式」にみられる特徴的な壺のことで、近畿から関東にかけて広く分布の認められる土器である。その特徴は、口唇部内面に粘土帯を貼り付けた突帯をめぐらせ、口縁部上端に平坦面をもつことが挙げられる。また、装飾性が強いことも特徴で、駿河地域の例をみると、肩部や頸部、口

縁部に弥生時代後期的な文様が施されている。

本遺跡の例では、残念ながら口縁部のみの残存であるが、推定口径38.0cmと大型で、器面には棒状の粘土紐を3本1組として貼り付けた文様が施されている。口唇部内面に巡る突帯や、砂粒を多く含む胎土、白色に近い色調は、駿河地域にみられる特徴と一致することから、出土した壺は駿河地域からの搬入品であると思われる。

県内出土の大廓式壺

千葉県内でも、この「大廓式壺」はいくつか発見されており、木更津市マミヤク遺跡や市原市雲ノ境遺跡等の上総地域、八千代市ヲサル山遺跡や印西市向新田遺跡等の下総地域に分布が認められる。しかし、出土した遺跡は合わせても8遺跡ほどと少なく、1遺跡に対して1点しか出土しない傾向がみられる。また、ほとんどの例が住居跡より出土しているのに対して、木更津市椿古墳群では墳丘裾部からみつまっている。この出土状況を考えると、この土器が祭祀的用途に用いられていた可能性も考えられる。

さらに、県内の類例には興味深い共通点が見られる。それはいずれの例もほぼ口縁部のみが残存しているという点である。この理由を考える場合、静岡県沼津市北神馬土手遺跡の例では、住居跡の炉に口頸部破片を埋め込んだ状態で出土し、土器の内面には被熱を受けた痕跡が認められた。また、口縁部を逆さにした状態で炉から出土した例などもみられることから、口縁部を炉の基礎としたり支脚として転用していたことが窺える。しかしながら、今回の例では、そのような出土状況はみられず、どのような用途で使用されたのか今後の検討が必要であろう。

キサキ遺跡5地点の概要

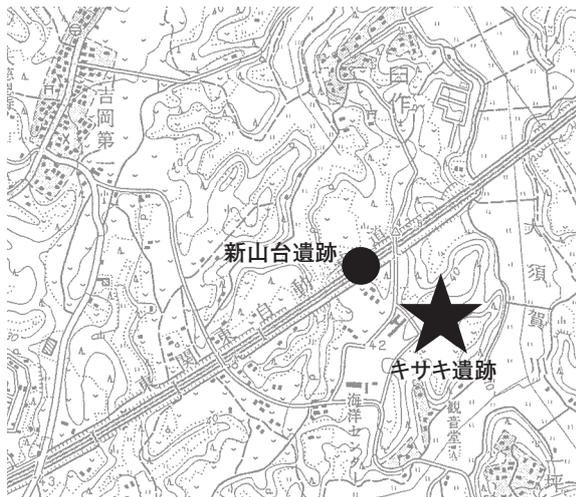
最後に、現在整理作業中であるキサキ遺跡5地点について簡単であるが触れたいと思う。この遺跡は、前述したキサキ遺跡4地点から、北側の谷を挟んだ台地上に立地する。発掘調査は、2,560㎡を対象に、平成21年2月から6月にかけて行われ、調査の結果、

台地中央部を中心に竪穴住居跡11軒等が検出した。ほぼ全ての住居跡床面からは、焼土や炭化物が検出しており、住居廃絶時に焼失させたものと思われる。出土遺物をみると、4地点で多く出土していた高坏や器台は少なく、^{かん}埴や坏の出土が目立つ。詳細については今後検討が必要だが、4地点よりやや新しい時期が想定され、古墳時代前期から中期の集落が形成されていたものと思われる。4地点の集落との比較・検討により、この地域が、当時どのような様相であったのか知る一つの手がかりとなるだろう。

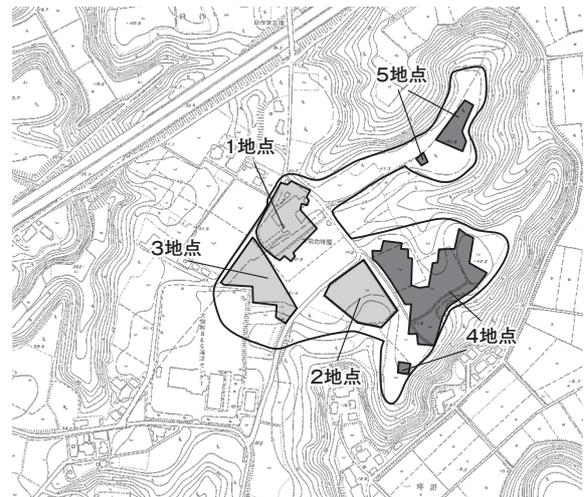
おわりに

キサキ遺跡4地点の調査で古墳時代前期の集落が検出されたことは、それまで縄文時代の集落跡と認識されてきた遺跡の性格を大きく変える新発見となった。この古墳時代前期という時期は、その名が示す通り、古墳が築造され始めた最初の段階であり、社会的にみても、初期国家が形成されはじめ発展していった大きな画期となる時期である。この時代の転換期といえる古墳時代前期の集落が発見されたことは、この地域の歴史を知る上で大変重要な成果を得たと考えている。

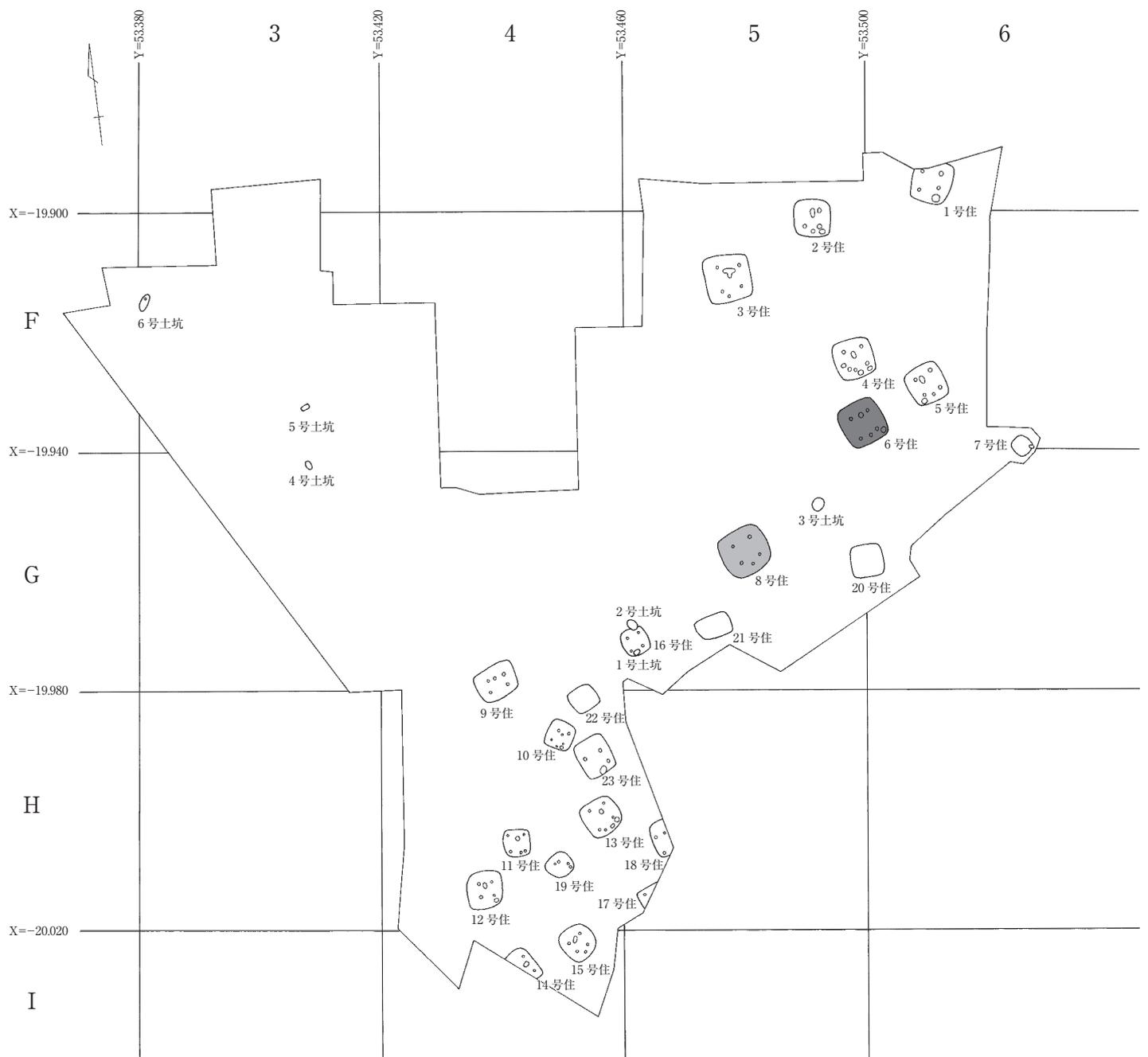
本遺跡の北東方向に位置する、現在の東関東自動車道大栄インターチェンジ付近に所在する多々羅堂遺跡からは、台地先端部に集中して弥生時代後期末から古墳時代前期に移行する時期の住居跡24軒が検出しているが、今回取り上げた超大型壺や大廓式壺など、東京湾岸地域や駿河地域にみられる特徴をもった土器が出土していないことから、異なる様相を示した集落といえる。環境や時期がほぼ同じ2つの遺跡で、なぜこのような違いがみられるのだろうか。他にも、本遺跡で出土した他地域に出自を持つ土器の意味、古墳時代前期に突如として集落を形成した人々がどこから来たのかという人の移動、4地点と5地点の集落の変遷といったいくつかの疑問点が残る。周辺における当該期の調査例増加によって、今後明らかとなることを期待したい。



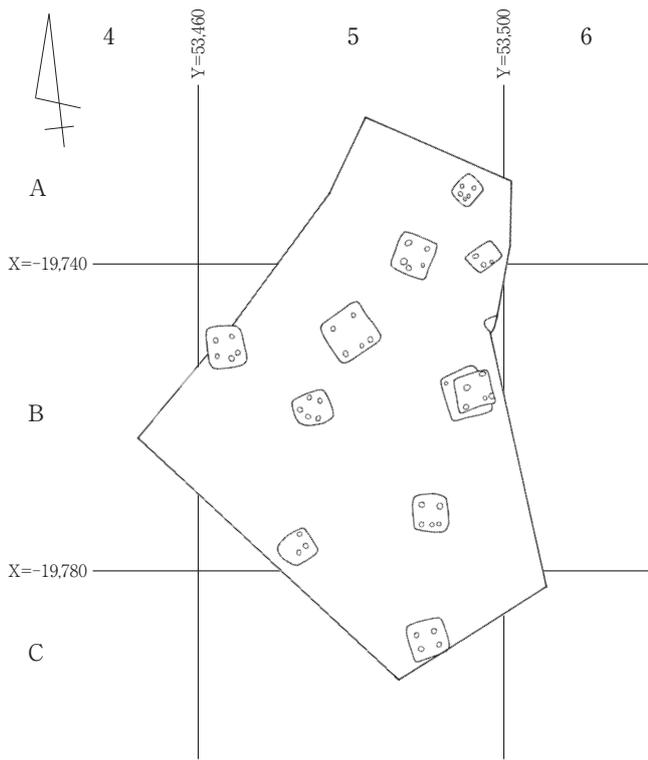
第1図 遺跡の位置図



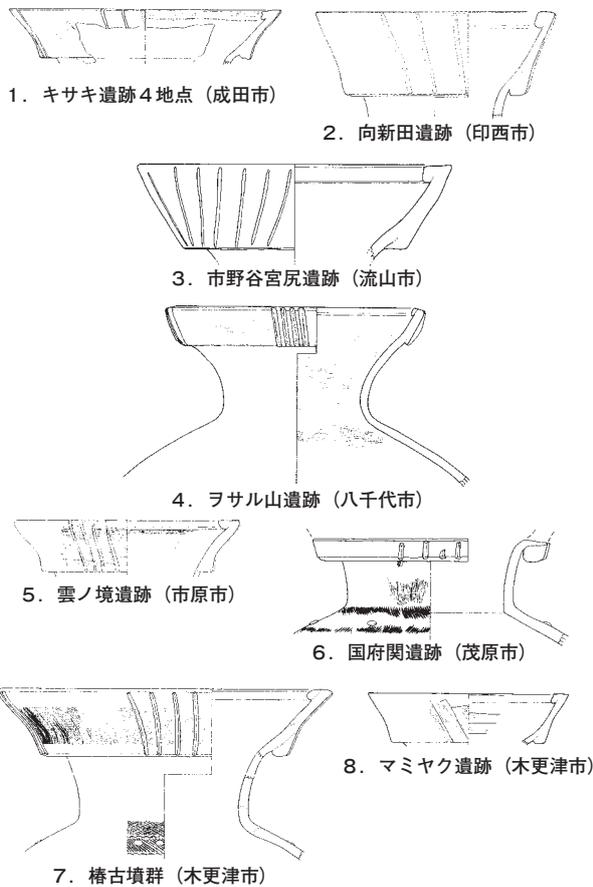
第2図 遺跡範囲と調査区



第3図 4地点遺構配置図 (S = 1/1,000)



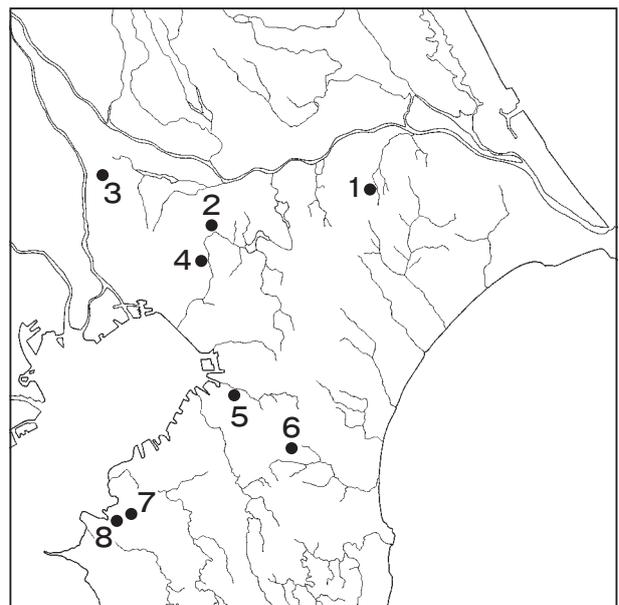
第4図 5地点遺構配置図 (S=1/1,000)



6号住居跡出土「超大型壺」



8号住居跡出土「大廓式壺」



第5図 千葉県内の主な大廓式壺集成図